

12回連載 エッセイ 第1話 「不肖の弟子なれど…」

徒然なるまま



安永暢男（元東海大学教授）

先頃、ミスタープロ野球と呼ばれ絶大な人気を誇った長嶋茂雄さんと、同じ巨人軍や大リーグヤンキースで活躍した松井秀樹さんに国民栄誉賞が授与された。国民栄誉賞は、内閣総理大臣表彰の一つのことであるが、選考基準や過程があまりオープンにされることがないので、時の首相の政治的パフォーマンスに利用されたのではと勘ぐりたくなるような例も無くはない。今回は、夫々時代を画した“ビッグ師弟”の同時受賞という初のケースでもあり、批判的な声はそれほどなかったようだ。

私事で恐縮だが、筆者にとっての一番の師といえば、昨年末に87歳で逝去された今中治先生である。今中先生は、戦後復興期から高度成長期に掛けて通産省電気試験所（後の電子技術総合研究所、現産業技術総合研究所）において、電気電子用素材としてのニーズが見出されたガラス・セラミックス等難加工脆性材料の精密加工技術の研究開発に尽力され、その後金沢大学や東京大学でも新しい精密加工技術の開拓に先鞭を付けられるなど、精密加工技術の発展・普及に大きく貢献された。本学会の前身である砥粒加工研究会が昭和31年に発足した際の設立メンバーのお一人でもある。

筆者は昭和40年（1965年）に電気試験所に奉職したが、配属されたのが今中先生を室長とする材料加工研究室で、先生の直接的なご指導の下で研究者人生を歩み始め

た。今中先生は、筆者にとっては正に“ビッグな師”であったが、その弟子たる筆者はというと、さしたる研究成果も上げられず、“不肖の弟子”のまま今日の黄昏を迎えてしまった。長嶋松井師弟のダブル授賞のニュースを聞くに付け、己の不甲斐なさを妙な形で思い知らされた感が強い。

さて筆者が就職した昭和40年というのは、昭和30年頃から始まった高度経済成長真っただ中の時代で、東海道新幹線、首都高速道路、名神高速道路などのビッグインフラの整備を急いで東京オリンピックに間に合わせるなど、内外に国力の回復と近代国家としての成長を印象付け始めた頃である。家庭生活でもテレビ・洗濯機・冷蔵庫という“三種の神器”が普及し始め、普通のサラリーマンにも自家用車が買えるといういわゆる“モータリゼーション”の気運が高まり始めたのもこの頃からであろうか。それまではただ羨望の眼で眺めるだけだったアメリカ映画の中の豊かな生活に、もう少し頑張れば自分達も近付けるのではないかと淡い期待も生まれ始めていた。当然世の中の景気も良く、就職に苦労するという状況にはなかったように記憶している。

そんな中で卒業時期を迎えた筆者は、農林省の研究所に勤める先輩から「役所は楽でいいよ」と聞かされて、あっさりと国家公務員を目指すことにした。右肩上がりの当時、公務員は人気がなく、筆者のような

ダメ学生でも合格出来てしまった。筆者が通っていた千葉大学で当時助手をされていた花岡忠昭先生(第6代砥粒加工学会会長)から、公務員になりたいのなら、と紹介されたのが電気試験所の小林昭先生(第2代砥粒加工研究会会長、後に東芝生産技研所長、埼玉大学教授)である。銀座のはずれにあった木挽町分室の古い建屋の2階に小林先生を訪ねて面接を受けた。ここが砥粒加工研究会草創期に熊谷先生(初代会長)、松永正久先生(東大教授)、今中先生などそうそうたるメンバーが集まって度々勉強会を開いていた現場であることは知る由もなかったが…。

正にこの頃は電子デバイス技術の黎明期で、電気試験所もシリコンなどの新たな電子材料に対する精密加工技術の開発体制を早急に整える必要に迫られて小林先生を部長とする電子加工部を新設したばかりの頃で、筆者のようなデキの悪い新卒でも背に腹は替えられずに採用して下さったようだ。電気試験所へ入所後間もない頃に物性部門の研究者から直径1インチ程度の小さなシリコンウェハを見せられ、「これがこれからの産業の主役になるよ」と言われたのを今でも鮮明に記憶している。実際この頃から

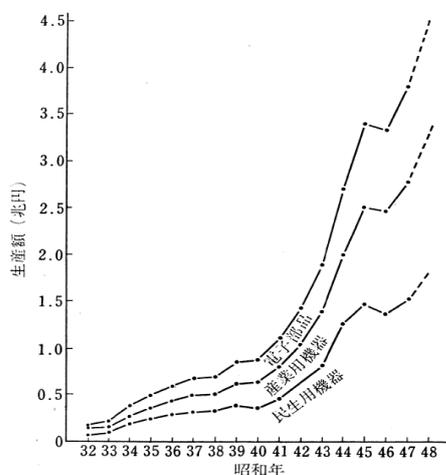


図1 日本における電子工業の生産額の推移

電子産業が急速に立ち上がり始めたことは図1の生産統計からも明らかである。

黎明期といえば、レーザ技術が生まれたのもこの時期で、1960年に最初のルビレーザの発振に成功して以来数年以内に、現在先端産業分野で不可欠となっている半導体レーザ、CO₂レーザ、YAGレーザなどの発振に成功し、色々な立場から夢が語られ、加工への応用も期待され始めていた。

このような現代社会を支える基盤技術の黎明期に社会人となったというのは単なる巡り合わせでしかないが、先端技術分野においては形状・寸法だけでなく表面性状に対する配慮も不可欠とされて、超精密加工へのニーズが高まるに連れ、砥粒加工技術にも新たな展開が求められ始めた丁度その時期に関連する研究に携われたことは、振り返れば筆者にとって幸運なことであった。

筆者が配属された今中研究室では、時どき夕方に飲み会を開いていた。そんな折に今中先生が、よく「一期一会」という言葉を口にされていたのを記憶している。戦争世代としての人生観の吐露でもあったと思うが、人との出会いは大切にすべし、という意識から、どんな相手にも常に誠実かつ丁寧に対応されているのを日頃目の当りにして、研究者としての前に一人の人間としての姿勢を学ばされた気がした。「一期一会」とは人との関係だけでなく、自分と異なる思想や価値観に出会った際に肯定的に理解したり許容する(排除しない)姿勢、と広く捉えることもできるが、これは頭では分かっていても実践となると凡人にはなかなか難しい、というのが筆者の実感である。遅まきながら残された人生では「一期一会」を認識し直して、満分の一でも“不肖の弟子”たるを返上したいと思うのだが…。